

シーボルト『NIPPON』の色つき図版

宮崎, 克則
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/10285>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．5，pp.1-56，2007-01．九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

3.『日本植物誌』(Flora Japonica)と『日本動物誌』(Fauna Japonica)



シーボルトは2人の助手とともに『NIPPON』を執筆した。それは、郭成章とホフマンであり、郭成章は(中国)広東大埔県の人で乾坤草堂主人と号し、中国語・マレー語でシーボルトを助けた。シーボルトは来日する以前のジャワ島で郭成章を知り、そのまま日本・オランダでも彼を雇った。ホフマンはシーボルトと同郷の(ドイツ)ビュルツブルク生まれで、帰国後の1830年にアントワープのホテルでたまたまシーボルトと知り合い、その助手となる。美声の持ち主でオペラ歌手となることを志していたが、後にはライデン大学日本学講座の初代教授となり、多くの日本に関する著書・論文を発表する(1)。

これに対して、『日本植物誌』・『日本動物誌』ではそれぞれの専門家の協力があった。『日本動物誌』は、シーボルトが日本において採集した膨大な動物標本や川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに、ライデン国立自然史博物館のテンミンクやシュレーゲルらによって研究・執筆され、1833年から1850年にかけて5つの部に分けて分冊で刊行された。シーボルトは彼らに原稿料を払っており、『NIPPON』と同じく自費出版であった。シュレーゲルは3780ギルダーの原稿料をもらったと自伝に記している(2)。

鳥 類(201種)	Aves	1844-1850	12分冊
魚 類(330種)	Pisces	1842-1850	16分冊
甲殻類(182種)	Crustacea	1833-1850	8分冊
ほ乳類(63種)	Mammalia	1842-1844	4分冊
は虫類(両生類を含む27種)	Reptilia	1834-1838	3分冊

シーボルトの予定では、各分冊は図版10枚・本文3〜4ページ、25分冊で完結の計画だったが、結局は43分冊となってしまう、無脊椎動物は甲殻類の部だけが完結し、その他は未完となっている。合計して313種が新種であり、日本を代表する動物がヨーロッパの学会に紹介された。ホンドタヌキ・ニホンオオカミ・ウグイス・メジロ・ヤマガラ・イシダイ・マダイなどが美しい手彩色の図版で記載されている。図版は主に標本にもとづいて作られているが、魚類編は川原慶賀の絵によっている。慶賀の絵は、現在でも図鑑の原画としてそのまま使用できるほどの精度で描かれている、という(3)。

『日本植物誌』は、シーボルトも著者の1人であった。当初、本文はミュンヘン大学の植物学教授ツッカーニーが分類学的所見をラテン語で書き、シーボルトはフランス語で植物の自生地・分布・栽培状況・日本名・利用法などを書いた。フランス語での記述は、広い範囲の読者を得るためであり、植物学者や園芸家の関心を引く観賞植物や有用植物を中心に紹介している。『日本植物誌』は2巻構成で、それぞれの巻に100枚の図版が含まれる予定であった。1巻の第1・2分冊は1835年にシーボルトによって刊行され、1841年に完結した。翌年には2巻の第1分冊が出たが、1844年に2巻の第5分冊を出した後に中断する。そして、シーボルトが死去した後の1870年にミクエルによって2巻の第6〜10分冊が出た。

掲載された植物は140種、ウツギ・ウメ・アカマツなど52種は学会未知の新種だった。図版は植物標本や川原慶賀などの下絵をもとに、当代一流の植物画家たちによって石版に描かれ、手彩色が施されている。刊行には膨大な費用が必要であつたと思われ、シーボルトは、園芸的価値のある野生植物が少なかったヨーロッパに日本の植物を導入するため、馴化植物園をライデンに開き、「シーボルト商会」を設立して園芸用の日本産植物の球根や苗・種子を販売した。筆頭は「カノコユリ」で、その球根は同じ重さの銀と取り引きされたといわれる。植物販売による利益は、膨大な出版費に充てられたと考えられるが、1844年以後は刊行を中断せざるを得ないほど、経済的に困っていた。そして1848年にツッカーニーも死去してしまい、『日本植物誌』はそのままとなっていた(4)。

『日本植物誌』・『日本動物誌』の初版本は数種類しか見ていないが、『NIPPON』の彩色図版と比べると、明らかに違う。とくに『日本植物誌』の図版は綺麗であるだけでなく、植物学的正確さにおいても優れ、出版当初から高い評価を得ていた。その図版の下部には一部を除き、画家と製版師の名前が明記されている。画家としてもっとも多くを描いたのは、ミンシンガー(Minsinger)であり、彼は当時全盛期だった他の著名な大型植物図譜の図版作成にも関与していたすぐれた植物画家であった(5)。植物の石版画を手彩色したのは誰なのか不明ながら、

『NIPPON』の彩色を依頼した人々とは大きく異なる。そのことは、シーボルトの日本妻の愛称をつけた「オタクサ(アジサイ)」と「カノコユリ」図版を拡大図とともに掲載しているので、明らかであろう。細部にいたるまで綺麗に、そして丁寧に手彩色されている。

〔注〕

(1)板澤武雄『人物叢書 シーボルト』、吉川弘文館、1960年。

(2)(3)山口隆男『シーボルトと日本の自然史研究』(『新・シーボルト研究』自然科学医学編、八坂書房、2003年)。

(4)大場秀章監修『シーボルト 日本の植物』(八坂書房、1996年)。大場秀章「シーボルトと彼の日本植物研究」・山口隆男「シーボルトと日本の自然史研究」(『新・シーボルト研究』自然科学医学編、八坂書房、2003年)。

(5)大場秀章監修『シーボルト 日本の植物』。

『日本植物誌』 **HYDRANGEA Otaksa** (アジサイ)



福岡県立図書館本



部分拡大(1)



OAG本 (色なし版)



部分拡大(2)

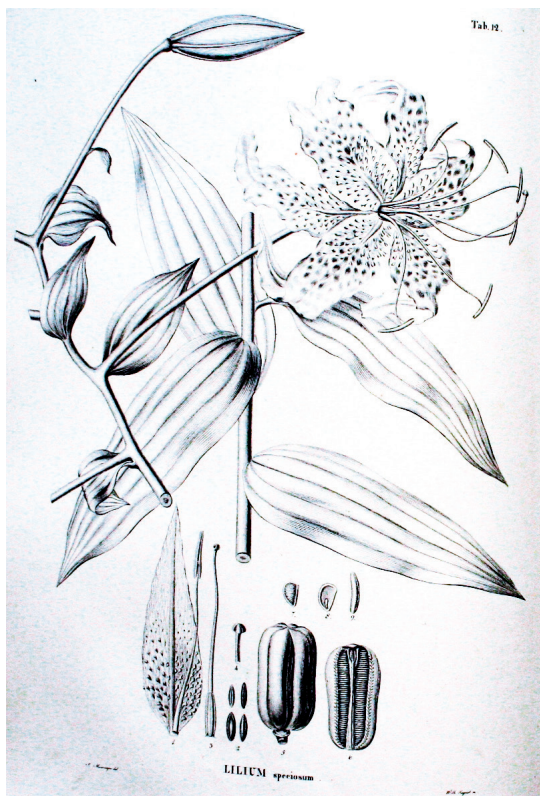
『日本植物誌』 *LILIUM Speciosum* (カノコユリ)



福岡県立図書館本



部分拡大(1)



OAG本 (色なし版)



部分拡大(2)

おわりに

シーボルトの代表作である『NIPPON』・『日本植物誌』・『日本動物誌』は、1832～35年にそれぞれの第1分冊がでた。豪華版の色つき版と廉価版の色なし版があり、色つき版は当時のヨーロッパで広く行われていた手彩色が施され、価格も非常に高価であった。彼は決して潤沢な出版資金を持っていたわけではなく、1834～35年には資金調達を兼ねてヨーロッパの宮廷を廻り、予約募集を行っている。どれほどの資金が集まったのか、出版の総費用はどれほどだったか不明であるが、彼は図版の彩色化をそれぞれに区別している。つまり、色の違いが重要な意味をもつ植物・動物画では、一流の人々に依頼して彩色させ、日本社会を描く『NIPPON』では二流、三流の人々に頼んでいる。それは出版経費の節約を考慮してのことであろう。『NIPPON』の第8回・9回配本、そして10回配本では色ムラの目立つ「雑」な彩色図版は少なくなかった。しかし、人物の服装の色合いが少し違っていただけとしても、日本社会を理解することの障害とはならなかったであろう。経費節減は、当然といえば、当然のことである。

現在でも、フルカラーの「論文」や「著書」はなかなか出すことができない。限られた資金をどの分野に集中して「いい本」を作るか、本論文でシーボルトの方針の一部を明らかにできたと思う。

『NIPPON』・『日本植物誌』・『日本動物誌』（福岡県立図書館蔵）

